



▲工場併設ショップ。今後は、工房見学なども予定する



▲素材となる海洋プラスチックゴミとbuoy製品



▲buoyの商品群

海洋ゴミのアップサイクル雑貨ブランド

buoy

捨 てられたプラスチックから捨てられないプロダクトをつくることを製品コンセプトとしているブランド「buoy」(ブイ)がこの4月に工場併設ショップをオープンした。

buoyはプラスチックメーカーである(株)テクノラボが展開する海洋プラスチックゴミのアップサイクル雑貨ブランド。プラスチックの未来について社会に提起できるようなプロダクトを、という考えからスタートした同社の有志による研究開発活動「Plas+Tech project (プラスチックプロジェクト)」から生まれた。

同プロジェクトではクラウドファンディングにも挑戦し、そこで知り合ったビーチクリーン活動などを展開する団体とも協業し、本格的に海洋ゴミを素材にした製品開発に着手。2020年7月から一般発売を開始している。

buoy製品は二つの大きな特徴を持っている。一つは、一切着色していない、素材を生かした色と模様だ。またもう一つが、プラスチックのリサイクル材などには用いず、ほぼ100%海洋ゴミだけで作っていること。安全性を確保するために製品の表面を覆うフィルムだけは海洋ゴミ以外を原料としているが、それ以外は全て海洋ゴミか

ら作られている。「産地」：すなわち海洋ゴミの回収された場所ごとに模様などの特徴はあるが、それぞれが一点物で、また手に取ると「海洋ゴミ」としての重みも感じさせられる。三つ目の特徴が海洋ゴミの産地を刻印している点だ。

素材となる海洋ゴミの種類は様々でその模様や色合い、また融点なども異なるが、それをしっかりと分別するのは現実問題として難しい。素材加工においては、様々な製品開発を行い、クライアントの多様な要望にも応えてきたテクノラボの高い技術力や提案力を生かし、試行錯誤を重ねながら、海洋ゴミが素材とは思えないほど美しく、そしてどこか優しいデザインの一つ物の雑貨商品を開発。コースターや大型の壁時計など、そのアイテム数は現在24種類まで拡大している。

また「産地」については現在、継続的に取引がある地域だけでも約30地域。昨年2022年にはビーチクリーン団体などから約1076キロのゴミを買い取り、製品開発を進める。

これまでECや産地に近いショップ、百貨店などのポップアップショップなどで展開していたが「実際に商品を見て購入したい」という要望も多く、また海洋ゴミなど

の問題をより多くの人に知ってもらいたいという思いから、工場併設ショップをオープンした。

「プラスチックは、そこから生まれた製品を愛着を持って使っていただけなのであれば、本当に魅力的な素材なのだと考えています。buoyとしては5年後には500トンの海洋ゴミ買い取りを目指してブランドを展開していきたいと考えているのですが、一方で、将来的には世界から海洋ゴミがなくなり、buoyというブランドがなくなることが理想とも考えています」

同社buoy 事業部ブランドオーナーの田所沙弓氏はそう語る。店舗に並ぶ美しい商品群を見ると、このブランドがなくなるのは惜しい気がするが、一方で、例えば深い青色のコースターを見るとやはり海と海洋ゴミの問題について深く考えさせられる。

(株)テクノラボ／buoy

<https://www.techno-labo.com/ebirth/>



▲大型の壁時計なども展開。将来的には家具の製作も視野に入れる